

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
 大学院生研究
 2006年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学研究科	組織神学 専攻
指導教員	所属・職名	氏名	
	文学研究科組織神学専攻・教授	竹原 創一 印	
自然・人文の別	人文	個人・共同の別	個人
研究課題名	アタナシオスの『言（ロゴス）の受肉』における神の善性の概念の特質		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科組織神学専攻博士課程後期課程3年	安井 聖 印	
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
研究期間	2006	年度	
研究経費	200	千円	

研究の概要 (200~300字で記入, 図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、アタナシオスが『言の受肉』の中で用いている「神の善性」の概念がどのような意味内容をもっているかを明らかにすること、また本書の論旨を形作っていく上で「神の善性」の理解がどのような役割を果たしているかを明らかにすることを目指す。そこでアタナシオスが神の善性に言及する際に用いている *avgao, j* というギリシア語の用例を本書から拾い出し、どのようなコンテクストで用いられているかを考察する。そして本書が特に主題としている受肉論、キリスト論と、「神の善性」の理解がどのようにかかわっているかを考察する。またアタナシオスが『言の受肉』を後編とし、その前編として書いたとされる『異教徒駁論』を取り上げ、『異教徒駁論』と『言の受肉』とを貫いて見えてくるアタナシオスの「神の善性」の理解を明らかにすることを目指す。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[アタナシオス] [神の善性] [人間理解]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

アタナシオスの最初期の作品である『異教徒駁論』と『言の受肉』は共に一つの作品を形作っており、そこには内容的な一貫性があると考えられる。ところがラウス(水落健治訳『キリスト教神秘思想の源流—プラトンからディオニシオスまで』, 教文館, 1988年, pp. 138-139; “The Concept of the Soul in Athanasius’ *Contra Gentes—De Incarnatione*”, *Studia Patristica* 13, 1975, p. 227, 231) は両書を比較して、『言の受肉』には『異教徒駁論』に見られるような人間の観想による救済の獲得という理解は見出されず、人間の救済において言の受肉が中心的な役割を果たしていると考え、次のように主張している。『異教徒駁論』ではプラトン主義の伝統に基づく観想の理解によって人間の魂が捉えられており、魂は神的な事物との本質的同一性をもつものであり、その魂が観想によって神との結合を成し遂げることができる。ところが『言の受肉』ではそのような理解は一変して、魂は無から創造されたものであり、全く神の恵みに依存しており、観想はもはや魂が神化するための手段ではなく、観想による救済という考え方はそれ以後のアタナシオスの作品の中に姿を見せなくなる。このように『異教徒駁論』は救済の能力が人間に内在していると考えているが、『言の受肉』は人間を全く悲観的に受け止め、ただ受肉した言だけが人間を贖うことができると理解している。そしてラウスは、このような両書の間の変化を、アタナシオスは『異教徒駁論』において新プラトン主義に一時的に関心をもったが、その後それを全く拒絶したのだ、と結論付けている。

けれどもピーターセン(A. Pettersen, *Athanasius and the Human Body*, Bristol, 1990, p. 15, 19) は『異教徒駁論』と『言の受肉』との間に異なった人間理解、救済理解があるとする見解を批判して、次のように主張している。アタナシオスは『異教徒駁論』において人間の観想の能力を語っている時にも、魂の神に対する自立性を強調することにはではなく、魂があらゆる偶像礼拝を捨ててご自分を啓示しておられる真の神を知るようになることに主要な関心を置いている。つまり『異教徒駁論』では啓示の教理を説明するコンテクストで人間の魂について論じられている。したがって受肉と贖罪の教理を述べることに主要な関心を置く『言の受肉』とはそのコンテクストにおいて違いは認められるが、両書において人間理解に本質的な相違があるわけではない。

『異教徒駁論』と『言の受肉』のコンテクストに注意を促すピーターセンの指摘は重要である。ラウスは『異教徒駁論』と異なり『言の受肉』では人間の神を知る観想の力が否定されており、両書の間で異なった救済理解、人間理解が展開されていると主張する際、死への腐敗から解放されるために悔い改めでは不十分であると述べる『言の受肉』第7章を重要な論拠として取り上げ、このように主張している。墮落の結果である死と腐敗は、『言の受肉』においては人間の実在の中に埋め込まれている。そして悔改めが人間にとって腐敗しない生へ立ち戻るために不十分であるとする『言の受肉』第7章の主張は、贖罪の問題に関して『異教徒駁論』と『言の受肉』との間の相違を決定的に示している。そこで第7章をそのコンテクストに即して検討する。

この箇所では死への腐敗から解放されるために悔い改めでは不十分である理由を、人間が「(神の) 像にかたどられた」という創造の時に与えられた恵みを剥奪されてしまったからこそ、人間が悔い改めによって死の束縛から解放され得ないと語っており(第7章3-4節)、創造の時に与えられた神を観想する力が墮落によって失われたと述べている。しかしこの箇所で見落としてはならないのは、何よりもまず神の真実性を傷つけてしまうからこそ悔い改めでは不十分である、と言われていることである。神の真実性の問題は第6章から論じられている。創造の時に神がお定めになった法の真実性のゆえに、その法に背いた人間を神はお裁きにならないわけにはいかない。そうでなければ神の真実性が損なわれてしまう(第6章3節, 第7章1節)。けれども人間が法の裁きのもとに滅んでしまうならば、悪魔の欺瞞と人間の怠慢によって神のみわざが消滅してしまうことになり、それでは神の善性にふさわしくない(第6章5, 10節)。このような議論の流れの中で悔い改めの問題が取り上げられていることを考慮すべきである。すなわち人間をお裁きにならないわけにはいかない神の法の真実性と、ご自分の創造のみわ

研究成果の概要 つづき

ぎを無になさるわけにはいかない神の善性との両者がどのようにして満たされるのかを問うている議論において、人間の悔い改めでは不十分であると述べられている (Cf. E. Mühlenberg, “Vérité et Bonté de Dieu : Une interprétation de *De Incarnatione*, chapitre IV, en perspective historique”, *Politique et Théologie chez Athanase D’Alexandrie*, C. Kannengiesser (éd.), Paris, 1973, pp. 215-230)。神の法の真実性は、人間の悔い改めによる解決を許さない。神の像にかたどられた恵みが奪われてしまったと述べているのも、そのような人間の側の変化にではなく、それほどまでに徹底して神の法に基づく裁きが人間に対して貫かれていること、すなわち神の法の真実性に強調点を置いているのである。

けれどもそのように神の真実性が貫かれると同時に、神の善性が貫かれなければならない。この問題を解決するためにこそ、神は言を受肉させられたのである (第 8 章 4 節)。受肉された言の十字架の死の内にはすべての人が死ぬことによって人々を腐敗に定める法が破棄され、言の復活の恵みによって人間は不滅の生へと引き戻された。アタナシオスは言の十字架と復活について、「この偉大のみわざは、ことのほか神の善性にふさわしいものであった」(第 10 章 1 節) と述べ、そこに現された神の姿を、ある国の住民が自分たちの怠慢のために盗賊に悩まされている時、その怠慢ゆえに彼らを見捨てるのではなく、自らの品位に関わることとして救済する王の姿になぞらえている。つまり言の受肉が神の善性にふさわしいのは、一方では神がご自分のお定めになった法を真実なものたらしめながら、他方でご自分の品位に関わることとして創造のみわざが無になってしまうように人間を回復してくださるからである。アタナシオスは神の善性という言葉によって、神が神であることを貫いておられる姿を表現している。したがってこれはハルナック (A. Harnack, 『キリスト教の本質』(山谷省吾訳), 玉川大学出版部, 1977 年, p. 215) が主張するような救済論から遡及した受肉論ではない。人間を救うことが目的とされつつも、そのことによって神の善性が貫かれることがそこで目指されている。

したがって第 7 章のこのようなコンテクストを考慮するならば、そこで悔い改めが不十分であると述べていることを論拠にして、『言の受肉』では『異教徒駁論』が論じていた人間の観想の力に対して消極的になったのだと結論付けるべきではない。ここでは人間の観想の力の変化が問われているのではなく、人間に対する神の法の真実性に基づく裁きと、そこでなお創造のみわざを無にすることなく人間を死への腐敗から解放してくださる神の善性が問われているのである。『言の受肉』における人間理解は、人間の観想の力の有無によって規定されているのではなく、神の真実性と善性によって規定されている。しかも善なる神が人間を死への腐敗に放置なさらずに、言の受肉によってそこから解き放たれる道を与えてくださったのであるから、神の善性が『言の受肉』における人間理解を決定付けているとすることができる。

そして神の善性が人間理解を決定付けているのは『異教徒駁論』においても同様である。『異教徒駁論』では神の善性に基づく自己啓示の前に立たされている人間が問題とされており、神がその善性に基づいて人間を創造なさったことが、人間が神を観想し得ることの前提となっている。したがって『異教徒駁論』と『言の受肉』の間では、神の善性が人間理解を決定付けている点で共通している。

ラウスが両書における人間理解の違いを主張する時、それぞれにおいていかなるコンテクストで人間の観想の力について論じられているかを考慮していないように思われる。コンテクストから切り離してそれぞれの人間の観想の力に関する言及を抽出して、そこで人間論を一般論として構築し、比較することは、方法論として不十分なものであると言わざるを得ない。コンテクストに即して両書の人間理解を辿るならば、そこで神の善性とは決して切り離し得ない人間の姿が浮かび上がってくる。人間の存在は神を観想する力の有無によってではなく、神の善性によって決定付けられているのである。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名, 論文標題, 雑誌名, 巻号, 発行年, ページ)
- ②図書 (著者名, 出版社, 書名, 発行年, 総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名, 開催日, 開催場所)
- ④その他 (学会発表, 研究報告書の印刷等)

④ 日本基督教学会第54回学術大会研究発表

日時: 2006年9月21～22日

場所: 上智大学